

あらいえびすがわ

洗 戎 川 水 系 河 川 整 備 基 本 方 針

平成 20 年 1 月

兵 庫 県

目 次

1. 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	
(1) 流域及び河川の概要 -----	1
(2) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針 -----	3
2. 河川整備の基本となるべき事項	
(1) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項 -----	4
(2) 主要な地点における計画高水流量に関する事項 -----	4
(3) 主要な地点における計画高水位、計画横断形に係る川幅に関する事項 -----	5
(4) 主要な地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量に関する事項 -----	5

1. 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

(1) 流域及び河川の概要

洗戎川は、夙川、東川に挟まれた両河川の扇状地を流れ、河口の西宮港から大阪湾へ注ぐ、流域面積約 0.8km²、河川延長約 1.9km の二級河川である。

河川勾配は緩く国道 4 3 号より南側では約 1/1000 である。

洗戎川は法定河川上流端の国道 2 号から市街地内を直角に曲がりながら流れて、西宮神社の下流で暗渠となる。国道 43 号付近で下水道の洗戎川雨水幹線と合流し、暗渠の流路は市道の地下をほぼ真南に流下する。建石町から再び三面張の開渠となり、直角に曲がりながら最下流の酒造地帯を流れて西宮港から大阪湾に注ぐ。川幅は下流の開渠部で 6 m 程度であるが、その他の大部分は狭小である。

ニテコ池付近の丘陵地の他は大半が低平地である。流域内は、水源地のニテコ池と周辺丘陵地の一部に自然が残っているが、現在、流域の約 99% が市街地である。

洗戎川流域の地質は、流域北部のニテコ池周辺は凝固度の弱い礫、砂、粘土からなる大阪層群、段丘礫層などの洪積層であり、ニテコ池の南側は主として夙川の氾濫により形成された沖積層である。

気候は瀬戸内海性気候に属し、年降水量は 1200mm～1300mm 程度と少ない。兵庫県の本州海側での降水量が 2000mm 程度あるのと対照的である。平均気温は 15.8℃と温暖である。

兵庫県の南東部では、台風期だけでなく梅雨期にも集中豪雨が発生しやすい。その原因として、湿潤な空気が南の海上から紀伊水道を経て、この地域に直接流入し、それが地形的に収束されるためであるとされている。これまでも台風期とともに梅雨期の記録的な大雨により大きな災害を引き起こしている。

洗戎川流域は、高度成長期以降、都市化の進展により地表面の多くの部分が舗装され、地中に浸透したり、田畑に貯留されていた降雨が、一気に河川に流出してくることとなった。また、河川の氾濫域における人口、資産の集積が進んだことで、浸水が発生した場合の被害は増大している。

洗戎川の改修は、都市小河川改修事業により昭和 50 年度から着手し、18 年間にわたって改修された。

しかし、近年においても平成元年 9 月に時間雨量 100mm を超す記録的豪雨に見舞われ被災したほか、平成 11 年 6 月の梅雨前線、9 月の集中豪雨による浸水被害が発生している。また、人口・資産の集中にともなう浸水被害に対する社会的、経済的影響の増大や近年の集中豪雨などによる内水被害の顕在化に対して、よりレベルの高い治水対策が求められている。

さらに、大阪湾に面した洗戎川は高潮の被害を受けやすく、昭和 9 年 9 月の室戸台風や昭和 25 年 9 月のジェーン台風、昭和 36 年 9 月の第 2 室戸台風などでは、阪神電鉄以南の地域が浸水している。しかし、これまでに高潮対策は実施されておらず、今後、洗戎川の高潮対策が必要となっている。

洗戎川の歴史・文化には、洗戎川沿いに“戎さん”の名で親しまれる西宮神社がある。江戸時代になると“宮水”が発見され酒造りが盛んになり、洗戎川の下流は、宮水酒造地帯となっている。

また、桜の名所満池谷は、野坂昭如の小説「火垂の墓」の舞台となった所である。文化施設としては、西田公園に万葉植物苑がある。

最上流部の河道は川幅 1～2m 程度の水路の形態をしている。植生は西宮神社の垣根沿いや民家の植え込みなどに僅かに存在する程度で、魚類の生息も確認されていない。沿川の西宮神社の周辺では、メジロやコゲラなどの鳥類やアオスジアゲハやカナブン等の昆虫類が確認された。西宮神社の境内に保全されているクスノキやクロマツなどの樹林が、これらの生物の生息に寄与していると考えられる。

西宮神社の下流から建石町にかけての河道は暗渠化されている。建石町から再び開渠となり三面張の河道が整備されている。河口には防潮樋門が整備されているが、平常時は閉鎖されているために河口付近は淡水の閉鎖性水域となっている。この水域ではカダヤシなどの魚類が確認されている。

流域のほぼ全域が市街地で下水道により集水されていることから平常時の水量は少ない。また、農業用水等の既得水利権もなく河川水の利用はされていない。

水質については、下水道整備が進んだことにより平成 8 年以降の BOD(75%値)は 1～3(mg/l)程度で推移している。

河川の流況については、これまでに定期的な観測が行われておらず把握されていない。

(2) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

洗戎川においては、治水・利水、生態系、水文化・景観、親水を4つの柱とした「“ひょうご人と自然の川づくり”基本理念・基本方針」に基づき、河川整備の実施状況、水害の発生状況、河川利用の現状、河川環境の保全、西宮市の総合計画等を考慮し、河川の総合的な保全と利用を図る。

洪水、高潮等による災害の発生の防止又は軽減に関しては、100年に1回程度の降雨で発生する洪水から人命、資産等を守ることを目標とする。

洗戎川流域は、ほぼ全域が夙川や武庫川の氾濫により形成された沖積平野であるため地形や河川の勾配が非常に緩くなっている。このため、拡幅などの河川改修にあたっては、多大な用地を必要とすることに加えて、都市化の進展による用地買収の困難化や工事の物理的制約などから必ずしも効率的でない。また、下水道は河川の整備水準を超えない範囲での管渠、ポンプ施設の整備が概成している。これらの状況を考慮し、今後は河川や下水道等を一体として、雨水貯留施設の整備などによる総合的な治水対策により、流域全体の治水安全度の向上を図ることとする。

河川対策としては、都市化が進展した沿川の土地利用状況や暗渠化された現況の河道形態を考慮し、道路の地下等の公共用地を利用した洪水調節施設の整備により、目標とする安全度の確保を図る。

下水道としては管渠整備や学校、公園等を利用した雨水貯留施設の整備等により、内水被害に対する安全度の向上を図る。

また、高潮時の浸水被害の防止または軽減を図る。

計画規模を超過する洪水や高潮に対応するため、情報伝達体制及び警戒避難体制の整備を行うとともにハザードマップの作成支援や防災意識を高める取り組みを行うなど、情報の提供と共有により地域住民主体の防災活動の支援を行い、総合的な被害軽減対策を関係機関や地域住民等と連携して推進する。

河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関しては、現在、河川水の利用はないが、震災などの緊急時には、河川水の利用が図られるように配慮する。

洗戎川流域および関連する地域の水循環を考慮し、西宮市等の関係機関との連携のもと、広域的・総合的な取り組みにより、流水の正常な機能の維持・改善を図る。

河川環境の整備と保全に関しては、河川の水質について、今後も関係機関と連携し、水質の改善に努める。

今後も動植物の生息状況等についてモニタリング調査を行い、河川環境の把握に努める。

また、河川の水質や環境の維持、改善等を図るため、河川の流況の把握に努める。

河川の維持管理に関しては、災害の発生の防止又は軽減等の観点から、適切な維持管理を行う。

2. 河川整備の基本となるべき事項

(1) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項

基本高水のピーク流量は、計画基準点前浜において 22 m³/sec とし、洪水調節施設により 11 m³/sec を調節して、河道への配分流量を 11 m³/sec とする。

基本高水のピーク流量等一覧表

河川名	計画基準点名	基本高水のピーク流量 (m ³ /sec)	洪水調節施設による調節流量 (m ³ /sec)	河道への配分流量 (m ³ /sec)
洗戎川	前浜	22	11	11

(2) 主要な地点における計画高水流量に関する事項

計画高水流量は、前浜地点において 11m³/sec とする。



(3) 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係わる川幅に関する事項

主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係わる概ねの川幅は次表のとおりとする。

主要な地点における計画高水位及び川幅一覧表

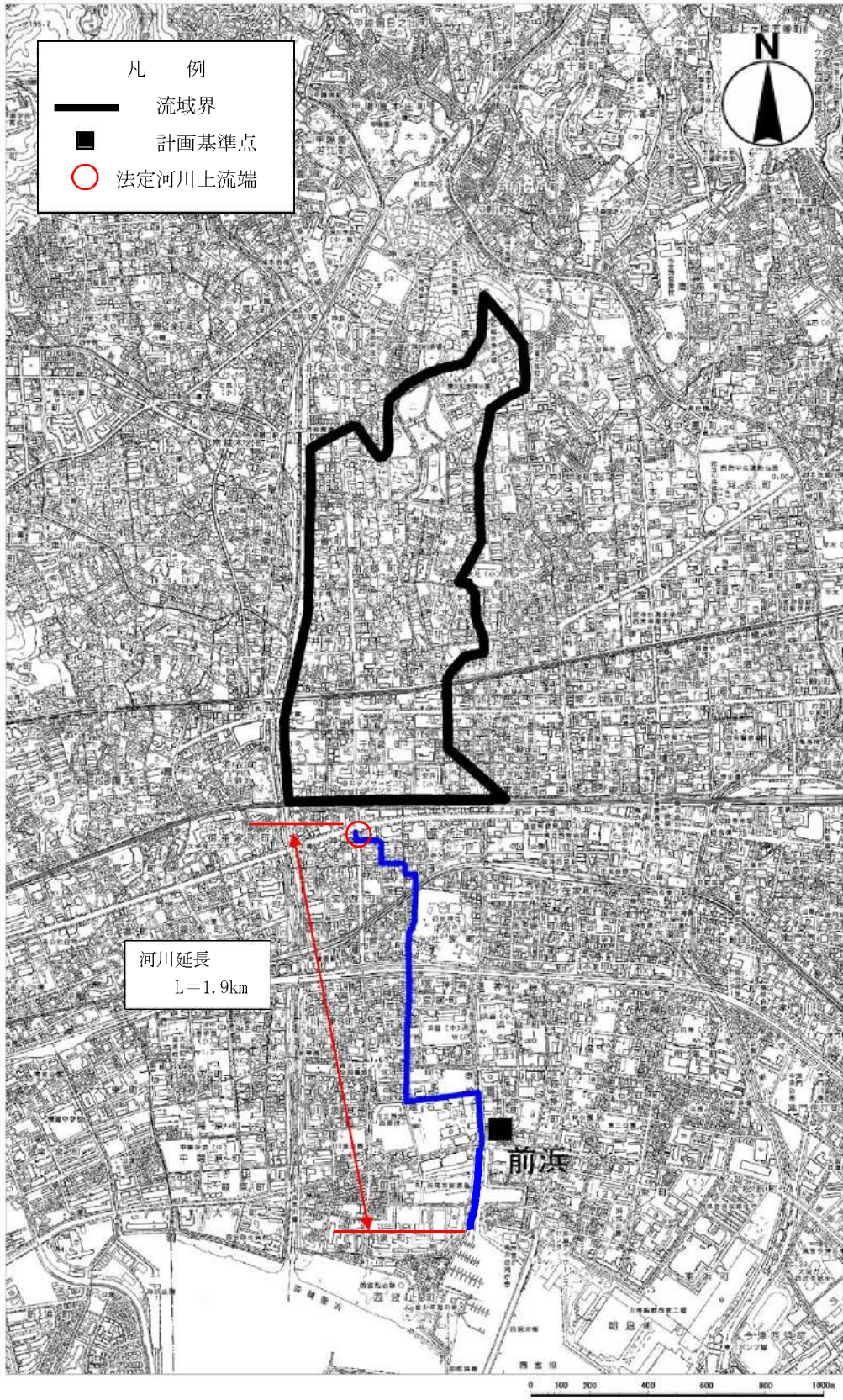
河川名	地点名	河口からの距離 (km)	計画高水位 (T.P.m)	川幅 (m)
洗戎川	前浜	0.55	1.01	6

注) T.P. 東京湾中等潮位

(4) 主要な地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量に関する事項

洗戎川は既得水利はない。

流水の正常な機能を維持するために必要な流量に関しては、洗戎川が有すべき水量を今後調査検討し、明らかにしたうえで決定するものとする。



洗戎川水系図